

## 男子部中等科・高等科

### 「継続的取り組みとしての学業報告会～Presentation-Based Learningの試み」

林 剛

男子部では「主体的な学び」をテーマにこの一年教育に取り組んできた。いかに学習者が自律性(Autonomy)を保ちつつ学んでいくのかは、文科省の進めるアクティブラーニングの流れと相まって重要な学習過程の要素といえる。一方、英語教育学の領域では、現在は『ポスト教授法時代(The Post-Methods Era)』とも呼ばれており、様々なアプローチやメソッドが飽和状態であることも指摘されている。そのような新たな英語学習・教育の指針となる枠組みが求められている中で、「人おのおの自ら教育する」自由学園の教育として何が現在必要とされてきているのかを思索してきた。

中等・高等教育において、プロジェクト型学習(Project-Based Learning)が注目されている昨今、自由学園は行事の運営や様々な学習の形態の中で、このプロジェクト遂行型の学びを伝統的に継承し実行してきているとも言える。また、一日の学園生活で、朝から晩まで「報告」という形で大勢の仲間に向かって情報を発信する伝統が根付いている。このような風土の中で生徒たちの発信能力は研ぎすまされていく。伝統的なプロジェクト遂行型学習と報告の伝統を活かす学びとして著者はプレゼンテーション中心の英語学習(Presentation-Based Learning)の実践を試みてきた。学業報告会は生徒の学びを最終的に発表という形で提示していくが、生徒が多くての主体的な学びを体得できる機会を二年に一度の一過性のものとするのではなく、継続的な学びと経験として定着できるよう検討が必要であると考えている。本稿では継続的学業報告会形式の学びとしてのPresentation-Based Learningの可能性について検証していきたい。

#### I. はじめに

##### 1. 現代の教育的潮流と自由学園教育

プロジェクト型学習において学習者は、話し合い・調査・発表の一連の過程を経ていく。本稿で検討していくPresentation-Based Learningにおいても、生徒たちは与えられたトピックに関して何を発表するのかを話し合い、テーマを設定し、英文原稿を作成、発表練習を経て、発表本番に臨む。テーマ設定の話し合いや練習の過程で生徒は互いにコミュニケーションをとり、問題を解決していく。創立者は“教育は交わりである。よく交わるものはもっともよく教育される。共に交わりつつ相互に教育される”と述べており、学びを個人の達成に終えるのではない、協同学習(Cooperative/Collaborative Learning)の重要性について早くも言及しているということは注目すべき点である。

創立者の教育の先見性は発言の随所に見られ、“自らを教育せんとする気概”、“生徒をして自

ら教育することに熱心になるように導くことは何よりも大切な私たちの務め”という言葉は、現代の教育学の一大分野である動機づけ(Motivation/Motivational Strategy)についての洞察であると言える。加えて“人おのおの自ら教育する”必要性は、現代の高等教育においても課題であるAutonomous Learning(自律学習)の研究へと結びつく。

また、授業や教育における世界的潮流は i) Teacher-Centered から Student-Centered へ、ii) 講義中心(Lecture-Based) からタスク中心(Task-Based)へ向かっており、これは i) が学園の自治教育、ii) が、責任が人を育てる教育、実生活に根ざした活きた学び、『生活即教育』の精神へと繋がっていくものであると言える。

日本においては、教育学者苦野一徳氏が学びの個別化・協同化・プロジェクト化を提案している。教師が考えるべきトピックを与え、生徒が互いにディスカッションをし、発表までのタスクを遂行

していくという点で Presentation-Based Approach は学習の協同化・プロジェクト化に寄与できるものであると考える。

## 2. 現代に必要な英語力とは何か

次に、Presentation 型学習は、高度に IT 化・グローバル化した社会の中で、どのような英語力を育成し得るのかということについて検討したい。インターネットの拡大により、国際電話によるやり取りから、Eメールや各種 SNS による情報交換へと国際的なコミュニケーションの手段は変化を遂げてきた。これは音声を媒介とした交流から、文字による情報発信と収集への転換を表し、書く力の復権とも言えよう。また、単なるダイアログ形式の英会話の力から、TED Conference に見られるようにプレゼンテーションする力がネイティブにとっても習得していききたい能力となってきた。単に英会話できる力からの脱却は、大手英会話学校 N社が 2007 年に経営破綻したことにも象徴されている。書く力とプレゼンテーションする力は、私見ではあるがグローバル化した世界を生きていくために日本の英語教育が取り組まなければならない課題であると考えられる。

Presentation-Based Learning では英文で発表原稿を作成し、聴衆に発表することをゴールとしている。原稿作成の過程で生徒は簡潔かつ達意の英文を書くことと向き合わなければならない。プレゼンテーション型学習がグローバル化した社会に、近い将来飛び立つ学習者たちにとって価値ある学びを提供し得る理由の一つである。

## II. Presentation-Based Approach のこれまでの具体的取り組み

### 1. 「日本を売り込め」

この課題では、日本の文化や商品を外国人に紹介することを目的とした。例として、日本の夏祭りや金魚すくいなどの屋台について説明したグループがある。中には、日本の武士道やサムライ映画がスターウォーズなどのハリウッド映画にも影響を与えたという発表をしたグループもあった。

各発表は、PC が必要な課題はその目的に従ってパワーポイント、ワード、エクセル等のソフトも操作を説明し使用していく。しかし、日本の週刊

マンガ雑誌が夢と希望と冒険に溢れているという主張を展開したチームは、書店での劇形式というアナログの手法を効果的に用い、笑いを誘う場面も見受けられた。

### 2. 「デンマーク人体操指導者に一日ツアーを提案しよう」

体操会の指導のために学園に数カ月程滞在するデンマーク人指導者に自分のお気に入りの場所を紹介するというものである。学園周辺のひばりヶ丘、東久留米を紹介するグループもあったが、池袋、吉祥寺、鎌倉の歴史散歩などといったものもあった。地元の浅草を紹介した生徒は、夕食を父親がシェフを務めるレストランでとるというプランを提案していた。

Presentation 型の学びで大切なのはテーマの設定である。テーマは調査が必要なものはあえて選ばない。答えが既に生徒の中に存在するものを考える。それはただでさえ思考が十分の一ほどになる英語による原稿作成の負担を軽減し、英語の自己表現に集中させるためである。不慣れなトピックを提示した場合、生徒は専門用語などの単語調べから始めなければならない。また、既に頭の中にある知識の発表は自己表現の英語経験でもある。

### 3. 「英語雑誌のコピーを学び、学園を宣伝する英語ポスター作製しよう」

高校英語基礎クラスで取り組んだプロジェクトである。ビタミン剤の宣伝コピーから “Chances are, you’re not getting enough real education!” (ひょっとして真の教育が足りてないんじゃないですか) といったものから、テクノロジーの宣伝から “How would you use education to make a better world?” (より良い世界を創るために教育をどう活かしたらいいのだろう) といった哲学的問いへと発展したグループも見られた。

### 4. 「英語でショートムービーを作ろう」

日本の四コマ漫画のリストから好きなものを選び、英語の台本を作り 1 分弱程のショートムービーを作ろうというものである。バブル後の経営不振に喘ぐ会社が役員のごうたら振りに由来するといった風刺ものが光っていた。

## 5. Presentation型学習を補完する学び

### (1) TED

TED Conference は言わずと知れたプレゼンテーションの殿堂である。数ある発表の中から、わかりやすく、生徒の興味を引く話題をプレゼンテーションのロールモデルとして授業で取り上げた。扱ったのはDerek Siversのリーダー・フォロワー論とKelly McGonigalのストレス論である。

### (2) フリーライティング

Free Writingは熟達したネイティブや研究者も取り込む手法である。これは、消しゴムも辞書も使わず、頭に思い浮かんだことを鉛筆を止めることなく書き続けるというトレーニングである。最初は四苦八苦していた学習者も何度か続けると要領を得て、B5の紙一枚分位書けるようになってくる。お題は与えるが、どこに話題が派生しても良い。英語を話すとは早く英語を書けるようになること、ということを実感できる。また、日本の英語教育は( )内に何が入るべきであるのかが中心的目的となっており、これが日本人が英語で発信する際の精神的障壁となっている。多くの場合生徒の作品は主張とメッセージを掴むに足る内容となっている。文法ミスより、書いた内容に対する感想を書くことで、伝えたいことがしっかりと伝わったことを生徒が確信できるように配慮している。しかし、生徒の作品読解とチェックに多くの時間がかかってしまい、実行したいだけの回数をやり遂げることができないことが大きな課題である。

## III. 報告会の取り組み

報告会で扱った課題は「英語で学園案内をしよう」というものである。希望してきた生徒は中二2名、中三1名、高二1名の4名である。4分の3の生徒が中学生であり、彼らの知識、語彙量で取り組める内容へと調理することが課題となった。体操会・登山・音楽会・美術展といった行事を担当する生徒、寮生活を描く生徒、学園生活を説明する担当といったように、生徒が掛け持ちをしながら協同作業を進めていった。発表形式はパブリスピーキング、ブース形式、動画作成、スライド作成等の実現可能性を吟味し、互いに討議した結果、ブース形式のスライド作成ということに

着地した。ブースで担当者が説明することもあり得たが、展示時間が一日中ということも考慮してスライドへキャプション挿入という形式をとることとなり、生徒はキャプション書きで書く力を育てていくこととなった。

スライドデータの収集は、朝の寮生の起床・乾布摩擦と朝食風景の撮影から始まり、学園図書館の資料室に協力をいただき、何千枚にも及ぶデータベースとにらめっこする作業が続いた。膨大なデータに奮闘する過程でも、中学生から高校生までの異学年で構成されるチームのメンバーは、話し合いと笑顔を交えつつ協力していった。

最後は高校生と中3の生徒が夜遅くまで粘り強く取り組みながら、初めて使う映像編集ソフトと格闘を続けて編集作業をやり遂げた。

## IV. 終わりに

本稿では、学業報告会で行われる研究-発表形式の学習の意義について考え、行事に終わらず、継続的な学びの形態として実践していくことの可能性をPresentation-Based Learningの提案という形で検討してきた。

今後の課題は、Presentation型学びを中等教育初期の段階に落とし込んでいくこと、マインドマップなどの手法を用いた自己表現の機会を創り上げていくことである。

創立者は、教育や活きた学びについて思索と実践を積んでいく日々は“本当に苦しい楽しみ、楽しい苦しみの時であった”と述懐している。来年度もこれからも苦しみつつ楽しみつつ教育の研究と実践を積んでいきたい。

## V. 参考文献

- (1)小嶋英夫・尾関直子・廣森友人(編集)  
成長する英語学習者 学習者要因と自律学習  
2010年 大修館書店
- (2)ジャック・C・リチャーズ/シオドア・S・ロジャーズ  
アプローチ&メソッド 世界の言語教授・指導法 2007年 東京書籍
- (3)ゾルダン・ドルニエイ 動機づけを高める英語指導ストラテジー35 2005年 大修館書店
- (4)苫野一徳 教育の力 2014年 講談社現代新書